

巻頭言

何故女子大学か
Why Women's University?

室伏 きみ子

Kimiko MURAKAMI-MUROFUSHI

2004年からの国立大学の法人化に向けて、世の中が何かと騒がしいことは、皆さんもよくご存知でしょう。こんな中で卒業生の皆さんにお会いすると開口一番発せられるのが「お茶の水は女子大学をやめてしまうのですか」という問です。いつも「いいえ、お茶の水は女子大で行きます。女子大の役割は、今でもまだまだ大きいですから」とお答えしています。では、国立女子大学はいらないとか、女子大は逆差別だとかいった意見も聞かれる中で、何故お茶の水は女子大学路線を選んだのでしょうか。

卒業生に、女子大に来て良かったと思われることは何かと尋ねてみますと、最も多い答えは「女子だけの環境で、自分の力で何でもやらねばならなかったので、自立心が養えた。また、女性でもやり遂げることが出来るという自信を持てた。これが就職したり、社会の中で何らかの役割を担う際にとっても役立った」というものです。私も、これらは大切な女子大の利点であると思います。よく、企業や共学大の方々から「お茶の水の卒業生は地味ではあるけれど、主体的によく頑張りますね」というお褒めの言葉を頂きます。仕事に就いてから簡単には辞めないのも、お茶の水の卒業生の特色かもしれません。共学校の先生方が「せっかく手塩にかけて育てて、やっとよい処に就職できたと思ったら、結婚だ妊娠だといって、すぐに辞めてしまう」と嘆いていらっしやいます。「先生の学生さんは、それでも頑張っていていいですね、育てがいがありますね」と云ってくださるので、私はその度に「ウチの子たち頑張っているな」ととても嬉しくなります。

女子大には、特に明治初期（明治5年東京女学校、明治8年東京女子師範学校）から日本における女子教育の牽引役であった本学には、いろいろな場でリーダーとして働ける女性を育てるという役割がありました。これは今後も全く変わらないでしょう。でもこれに対して「共学校だって立派なリーダーは育てられる、現に東大からも沢山の女性リーダーが生まれているではないか」という意見があり、これも間違いのない事実です。ではなぜ女子大なのか、女性が社会で活躍する場合の問題点について考えてみましょう。働く女性の前には沢山の問題が立ちまわっていますが、その中で大きな問題として女性のライフスタイルにあった働き方のできる環境が整っていないということが挙げられます。男女同権といわれ、男女間に何も差別があってはいけないと言われても、現に生物としての男女差は明らかに存在します。子どもを妊娠し、出産することは、逆立ちしても男性にできることではありません。ホルモンや代謝系の関係で、女性にはそれほど攻撃性の強い人は少ないでしょう。勿論個人差や例外はあって、とても攻撃的な女性や、優しく争いを好まない男性も沢山いますが、それはそれとして、ここでは全般的な傾向として述べているつもりです。

ところで、そういった女性特有のライフサイクルを考えたときに、特に理学実験系の職場では妊娠・出産を期に仕事を辞めざるを得ない人が少なくありません。本人が頑張るつもりでもそれを許さない環境があることは否めない事実です。一旦仕事を離れた後に、又職場復帰することは、時代の流れから取り残されてしまうこともあって、かなり困難です。しかしこれから益々世の中は女性の活力を必要としています。世の中が必要としていると云っても、世の中の流れから取り残された女性にはパートタイマー的な仕事しか用意されないでしょう。これを埋める為の再教育を女子大が扱うことが、今後の日本の社会ではとても大切なことになってくると考えています。再就職の為の準備教育や、さらにキャリアアップしたい人のための教育、これがこれからの日本の活力を生む為に必要なです。女性のライフスタイルに沿った形での教育が行えるのはやはり女子大しかないでしょう。共学校にはこういった教育を行うことはかなり難しい、そんなことはないとおっしゃる方があれば、ではやって見て下さいとお願いしてみましょう。

更に、女性には、女性の感性の上に開花できる新しい学問分野があるはずで、他大学と同じような、どこへ行っても変わらないような教育や研究を行っていたのでは、お茶の水の存在意義は小さいと思います。お茶の水ならではの教育と学問研究—さあ、皆さんはどんな花を咲かせてくれますか？

(お茶の水女子大学 理学部長)